片瀬のぞみだより

宗教法人日本基督教団片瀬教会付属

片瀬のぞみ幼稚園

2019 年 10 月号

家庭通信　2019　№

“子育ては祈りから”

主題聖句　「また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった」

マルコによる福音書 4 章 3～9 節、26～29 節

私はこれまでキリスト教教会に付属する五つの幼稚園で、約五十年間幼児教育に携わってきました。二学期になってよく「運動会がすんだあと、子どもたちが一段と成長し、逞しくなったように見えます」という保護者の声を聞いてきました。二学期には、運動会だけでなく、保育や諸行事の中で、一緒になって一つの課題に向かう活動の楽しさ、やり遂げた達成感や成就体験は、子どもたちにとって貴重な喜びの経験となっていくようです。

今月の聖書、マルコによる福音書第 4 章には、イエス様が教えられた「種まきのたとえ」が記されています、蒔かれた種がどのようにして実るのか「子どもの成長」とのかかわりで学びたいと思います。

子どもの成長、親は自分の子どもに対しての期待を強く持っています。しかし、その期待がしばしば子育ての誤りの原因にもなっています。あの人のようになって欲しいと親は結論だけに目を向けてしまい、それに至る過程を考えないことがあります。その人がどのように育ってきたのか、その人が育ってきた環境に関心を向ける必要があります。

子どもたちの成長にとって大切なことは土壌つくりです。現在子どもたちを取り巻く環境は決して良好とは言えません、「鞭端」「石地」「茨の地」としてしまい成長を妨げる環境は多くあります。しかし、考えてみると人間はもともと良い地を持っている人などは誰もいないでしょう。逆に、どんなに悪い地でも、雑草や石ころを取り除き、耕し肥料を与えるならば、豊かな良い地に転換することも出来るのです。私たちの幼稚園が主イエスの愛と平和に基づくキリスト教保育を通して保護者の皆さんの御理解と御協力により、子どもたちの実り豊かな土地づくりを願っているのです。

次に、子どもたちの良い土地づくりに続いて、良い種を蒔いて成長させ実を結ばせていくかということが課題になってきます。

マルコによる福音書 4 章 26～29 節には「成長する種」のたとえ話が記されています。このたとえ話の教えから、イエス様は「子育て」をどう考えておられるのかを学びたいと思います。

「人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうし

てそうなるのか、その人は知らない。」

昔の諺に「蒔かぬ種は生えぬ」とありますが、収穫を得るためには、先ず種を蒔くことが必要です。いつ、どこで、どのような種を蒔くかが大切です。続いて、芽が出て成長し、実が熟する養育するためには、その時々に適切な手当てが必要です。ところがイエス様は「夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそいなるのか、その人は知らない」蒔かれた種のための正しい忠実な働き手というのは、夜も寝ないでいつも目を話さず監視し、働き続ける人のことでありません。「夜昼、寝起きしているうちに」とは「夜寝て、朝起きることを繰り返していると」という意味があります。その言葉には、私たちが起きて勉強したり、訓練を重ねたりしている時だけ、知育も体育も徳育も習得し成長すると考えることが多いのですが、人間は眠っている時にも、いや眠っている時こそ種は芽を出して育っていくものなのです。

「どうしてそうなるのか、その人は知らない」現代の科学的な機器や知識によって、発芽や成長の仕組みを知り説明することができるでしょう。しかし、人間の限られた知識と力を超えているもの。小さい種の存在そのもの、その生命力、成長力について、どうしてそのようなかたちになるのか、本質的にはわからない部分が多くあるのです。

私たちは子どもに多くのことを期待して、能率的に機械的に経済的に「速成栽培」を考えていないでしょうか。これも古い童話ですが「早く目を出せ柿の種、出さぬとハサミでちょん切るぞ」という言葉には、人間の願望に対する焦りが示されています。

「土はひとりでに実を結ばせるものであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる」(28 節)「土はひとりでに」とは自動的に、機械的にということだはなく、人間の配慮と知識と力を超えてということです。

種の成長に人間の手をかけ、支え養う責任はありますが、しかし、責任は絶対的な「無限責任」ではありません。親も保育者もすべての環境も限界があるからです。子どもの成長は、人の目に見えることを見ると同時に、親の目、保育者の目の隠れた部分にどれだけ期待し、希望を持つことが出来るかが、この種のたとえから学び取っていきたいと思います。

現代は、知識の量が多い程よい教育だとの考え方が支配的です。あれもこれも学び、習得させ、知識や技能を詰め込んでいますが、それでよい教育がなされ、人格が形成されるとは限りません。自分に与えられ備えられた賜物を知り、用いてこの世に仕えていく心の教育こそが、人間の成長にとって必要なのではないでしょうか。

使徒パウロの言葉に「わたしは植え、アポロは水を注いだ、しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐものでもなく、成長させてくださる神です」(コリントの信徒への手紙Ⅰ　3 章 6～7 節)と記されています。この言葉はパウロの祈りです。人間の力を超えたところにある神への信頼こそが、子どもたちの養育成長にとって欠くことの出来ないことであることを示されます。「子育ては祈り」であることを心に留めて、子どもたちの成長を見守っていきましょう。

片瀬教会牧師　小林誠治